

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦畠遺跡 II

—墓苑建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

浦畠遺跡Ⅱ

—墓苑建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は新潟県長岡市来迎寺字浦畠 889 番地 1 ほかで実施した浦畠遺跡第 2 次発掘調査報告書である。
2. 調査の原因は長岡市による巴ヶ丘墓苑建設工事であり、調査主体は長岡市教育委員会である。
3. 発掘調査に要した経費は原因者である長岡市が負担した。
4. 遺物の註記は、以下のとおりである。

遺構覆土出土資料　　遺跡略号（UH）+調査年度（10）+遺構番号　一個別番号

調査区内出土資料　　遺跡略号（UH）+調査年度（10）+層名

5. 遺構番号は、遺構略号+通し番号とした。そして第 1 次発掘調査との混同を避けるため、201 番～とした。
6. 遺構平面図及び断面図は簡易造り方実測（1:10）で作成した。
7. 本書の執筆・編集は調査担当が行った。
8. 本文における遺構形態の表記は加藤〔1999〕に準拠した。
9. 本報告書の内容は先行する全ての報告・記載に優先する。
10. 調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　長岡市教育委員会（教育長　加藤孝博）

調査担当　長岡市教育委員会科学博物館　主任　新田康則

事務局　長岡市教育委員会科学博物館（館長　山屋茂人）

土木作業管理者　森山純一（株式会社永井工業）

発掘作業員　酒井 宏・太刀川幸男・成毛 馨

整理作業員　菊池正代・白井綾子

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

石坂圭介・安藤正美・駒形敏朗・小林 保

新潟県教育庁文化行政課・株式会社長測・有限会社越路地計

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置	
2 紙屋荘と周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	
2 調査の経過	
第Ⅳ章 調査の成果	5
1 調査の概要	
2 調査区の堆積状況	
3 遺構	
4 遺物	
第Ⅴ章まとめ	9
参考文献	

挿図・表目次

第1図 調査区位置図 (1:7,500)	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図 調査区全体図・土層柱状図	6
第4図 個別遺構図 (1:50)	7
第5図 遺物実測図 (1:3)	8
写真1 出土遺物	8
写真2 調査写真①	10
写真3 調査写真②	11
第1表 全体工程表	4

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成 20 年 5 月 30 日、長岡市越路支所市民生活課（以下、支所市民生活課と略す）から長岡市教育委員会科学博物館（以下、科学博物館と略す）に対し、長岡市来迎寺地内、浦畑遺跡における墓苑造成事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議の申入れがあった。

これは旧越路町時代に計画された緑地整備事業の一環であり、従前の協議のとおり盛土工法で進めるが、一部幅 30 cm 程度の土留めを敷設し、また、隣接して建設される予定の調整池取付け道路との取合い部分については、一部切土になる可能性があるというものであった。

これに対し科学博物館は、土留め部分は規模が少少であり工事立会いとなる可能性が高いが、実施設計の完成後に具体的な協議が必要であると回答した。そして、科学博物館では墓苑に隣接する浸水対策事業用地（調整池及び取付け道路建設）を対象とした確認調査を同年秋に計画しており、この調査結果等によって取付け部分の掘削可能深度を設定し、それを踏まえて支所市民生活課は保護上の措置が不要となるよう設計に配慮することを確認した。しかし、遺跡範囲確認調査実施前の 9 月、浸水対策事業が全体計画から除外されることとなり、これに伴い、墓苑の設計にも一部修正が図られることとなった。

その後、墓苑本体の造成に先行して、ここで供される水道の配管工事が実施されることとなつた。平成 21 年 5 月 15 日付け長越市第 26 号で文化財保護法（以下、法と略す）第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の通知があり、長岡市教育委員会は平成 21 年 5 月 18 日付け長教博第 58 号による意見を添えて新潟県教育委員会教育長に送付した。これに対し、新潟県教育委員会教育長から平成 21 年 5 月 25 日付け教文第 236 号により慎重工事するよう通知があった。科学博物館では平成 21 年 6 月 17 日に工事立会いを実施したが遺構・遺物の検出はなかつた。

その後も継続して墓苑本体について協議を重ねたが、最終的に市道（平成 19 年度本発掘調査区）からの通行路のうち、切土が必要となる部分については本発掘調査の実施が避けられないとの判断に至つた。

平成 22 年 4 月 12 日付け長越建第 7 号で法第 94 条第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘の通知があり、長岡市教育委員会は平成 22 年 4 月 16 日付け長教博第 24 号による意見を添えて、新潟県教育委員会教育長に送付した。これに対し平成 22 年 5 月 11 日付け教文第 164 号により、長岡市に対して工事着手前に本発掘調査を実施するよう通知があった。平成 22 年 5 月 20 日付けで支所市民生活課から科学博物館に対して本発掘調査の依頼があり、平成 22 年 7 月 6 日付け長教博第 116 号で新潟県教育委員会教育長に対して法第 99 条第 1 項の規定による発掘調査着手を報告し、本発掘調査を開始した。



第 1 図 調査区位置図 (1:7,500)

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の位置（第2図）

浦畠遺跡は新潟県長岡市来迎寺地内に所在する。来迎寺を含む旧三島郡越路町（現在の長岡市越路地域）は、新潟平野の南端部に位置している。この地域を信濃川流域（平野）とその支流渋海川流域（丘陵）、二つの地域に分ける大きな地理的障壁が越路原である。

越路原は信濃川左岸に形成された6面の河岸段丘のうち、越路原I面・越路原II面・越路原III面の総称する地名である。近年、渡辺秀男が信濃川ローム層中の広域テフラを基に段丘面区分と対比し、越路原II面について隣接する小栗田原面などと同一段丘面であるとして、あらたに「片貝面」と呼称しているほか、形成年代についても新たな見地が加えられ、それによれば、越路原I面は13～15万年、「片貝面」は10万年前頃、そして越路原III面の離水期は5.5万年前頃とされている〔渡辺 2007〕。

越路原は、形成時には信濃川に向かって緩やかに傾斜する地形面であったと推測されているが〔柳 1998〕、現在では片貝一真人背斜（隆起）と小千谷向斜（沈降）の褶曲運動によって舌状に独立した台地として新潟平野に迫り出す形となっている。さらに、片貝一真人背斜と小千谷向斜の活褶曲は10万年間の変動量が80mに達する大規模なものであり、国内で最も地殻変動の激しいところとなっている。

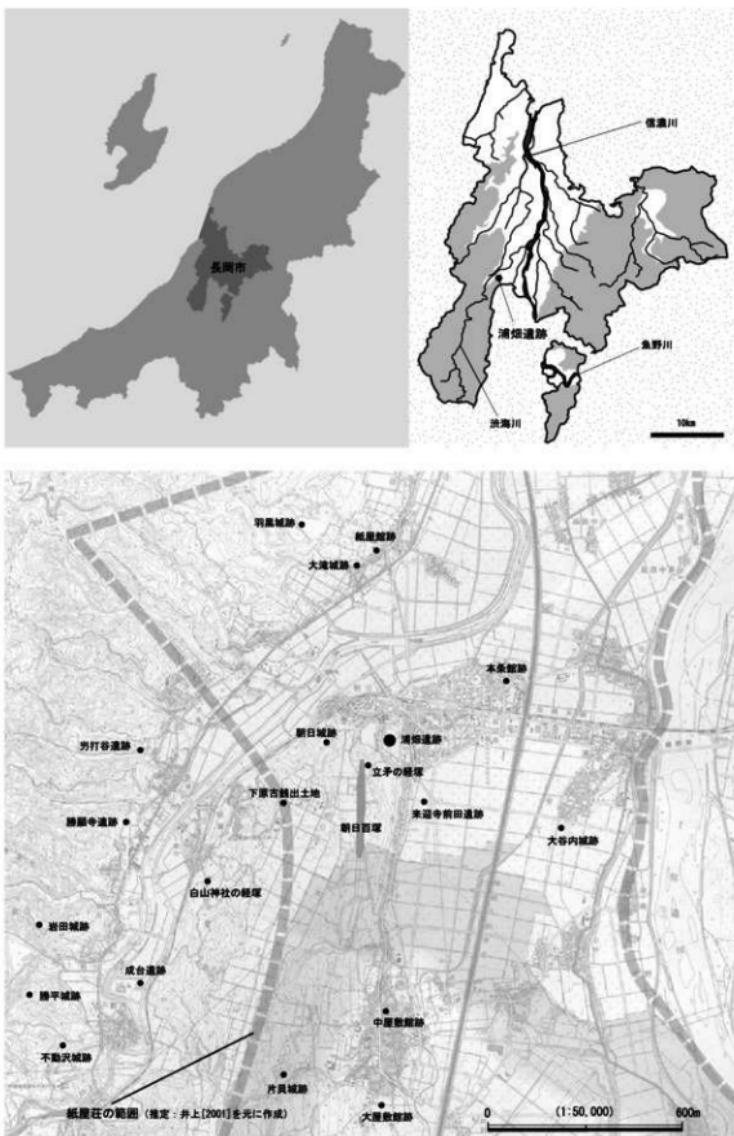
2 紙屋莊と周辺の遺跡（第2図）

紙屋莊 遺跡が所在する地域は、古く紙屋莊に含まれていた。紙屋莊は、平安時代に藤原摶間家領として成立した荘園である。いくつか散見される史料によって、紙屋莊は殿下御領であるものの、その年貢は宇治の平等院の運営費に当てられていたと考えられている〔井上 2001〕。

鎌倉時代、紙屋莊の地頭職は北条得宗家が得たが、鎌倉幕府が倒されたのち、大友氏泰にそれが与えられている（建武3年（1336）9月「足利尊氏袖押下文」）。その後、一時南朝方の風間氏に地頭職が与えられていたが、二代將軍足利義詮によって氏泰の弟大友時方に地頭職が与えられている（貞治元年（1362）11月「室町將軍家判袖下文」）。大友氏による領有は、永徳3年（1384）まで史料に確認できる（「大友親世所領諸職注文」）。一方、南北朝期の建武3年（1336）には、北朝方の光厳上皇によって、紙屋莊などの莊園を実相院領として承認する院宣が発されている。さらには永享3年（1431）、鎌倉公方足利満兼の弟である、篠川公方足利満直の所領となったとされる。この件について、『満済准后日記』永享3年（1431）2月29日の項に、替地を考慮することで門跡から了承を得た旨が記されている。しかし、その28年後の長禄3年（1459）に作成された「実相院門跡領目録」には「越後国紙屋莊」が確認され、実態は不明である。この後、紙屋莊の領有を伝える史料は確認されていない。

周辺の遺跡 ここでは地理的範域としての紙屋莊について、遺跡の分布をみていきたい。まず、いくつかの城館跡が知られている。遺構が現存する、あるいは発掘調査によって確認されているものとしては、大庵城跡・紙屋館跡などがある。また、土地更正図や伝承などにより存在が推定されているものとして、羽黒城跡・本条館跡・建之内館跡・大谷内城跡などがある。

このほか、浦畠遺跡の西、越路原の上には朝日百塚や、立矛の経塚が分布する。付近には1,311枚の備蓄錢が出土した下原古銭出土地があり、中世において、越路原にある種の境界あるいは異界・外界が認識されていた証左であろう。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第III章 調査の方法と経過

1 調査の方法

今回の調査区が第1次発掘調査区と隣接することから、第1次発掘調査で設定した調査グリッドを復元し、調査に臨んだ。調査はバックホウ 0.2 m³級と人力掘削を併用して実施した。重機での掘削は表土層・盛土層を対象とし、それより下位の層はジョレンなどを用いた人力作業で面的に掘り下げた。

検出した遺物は、調査区の堆積状況及び遺物の出土状況から出土位置に高い原位置が保持されている保証が低いと判断されたため、遺構覆土以外から出土したものは層位ごとの調査区一括遺物として取り上げた。遺構覆土中から出土したものについても、同一遺構中に有意な時間差のある遺物群が含まれているような状況ではなかったため、最終的には遺構一括遺物として取り上げた。

遺跡全体平面図は平板実測(1:50)で作成し、個々の遺構図(平面図・断面図)は簡易やり方実測(1:10)で記録した。そして、用地測量用に設置された基準点を利用して標高値をえた。

調査写真にはキヤノン EOS-Kiss5 (レンズ20-35mm) とキヤノン EOS-Kiss digital (レンズ18-55mm) を併用し、それぞれ35mm白黒フィルムとJPEG形式で記録した。

2 調査の経過

発掘調査の経過 平成22年7月26日に調査器材を搬入するとともに、バックホウによるすき剥ぎにて表土(Ⅰ層)を除去した。褐色土層(Ⅳ層相当)上面で、第1次調査のSK8とSK11の未調査部分と推測されるプランを検出したほか、土師質土器の集中部を2箇所検出した。翌27日より作業員を加えての調査を開始した。褐色土層を調査し、黄褐色風化火山灰土層(Ⅵ層)上面で調査区全体の遺構確認を行った後、遺構の調査を開始した。30日、ここまで検出していった遺構の調査を完了し、調査区全体の精査を行った。この段階で掘立柱建物を構成する柱穴と思われる土坑群を1棟把握した。全体写真撮影後、埋戻しを行い、器材及び重機を撤収して現地での調査を終了した。

整理作業の経過 整理作業は9月24日から断続的に実施した。出土遺物は、水洗いした後、註記した。遺物の註記は、遺跡略号(UH)と調査年度(10)とを組み合わせた「UH10」に統いて、遺構出土遺物は遺構名+個別番号を、それ以外のものについては出土層位名を記入した。出土遺物・記録写真・記録図などは全て長岡市教育委員会埋蔵文化財整理作業所に保管している。

第1表全体工程表

	平成20年度	平成21年度	平成22年度											
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
事前協議														
調査準備														
発掘調査														
基礎整理														
分類・観察														
遺物固化														
原稿執筆														
印刷・校正														

第IV章 調査の成果

1 調査の概要（第3図）

調査によって遺構 23 基と遺物 46 点を検出した。検出遺構は掘立柱建物跡 1 棟、土坑 7 基、ピット 11 基に分類される。ピットについては柱穴を想起させる形状・堆積状況を有するが建物跡を復元するには至らなかったものも含まれる。これには P206・P208・P212・P213 が該当する。

2 調査区の堆積状況（第3図）

調査地は信濃川左岸に位置する越路原Ⅲ面の東端段丘崖に向かう緩斜面地である。したがって東に向かって緩やかに下っている。遺跡における堆積状況は第1次調査報告書[長岡市教育委員会 2008]に詳しい。ここでは最も良好な堆積を示す地点（基本層序②）において、I 層=表土層（耕土層）、II～IV 層=黒ボク土層、V 層=漸移層、VI 層=黄褐色風化火山灰土層を把握している。

第2次調査区では、調査区西側に一部IV層に相当する層序が残っていたが、長年にわたる畑作の影響で自然堆積の黒ボク土層が消滅していた。このため遺構確認はVI層上面で行った。このような黒ボク土の遺存状況は、平成 15 年の試掘調査及び第1次発掘調査において、遺跡の広い範囲に認められている。

3 遺構（第3・4図）

S B201 C～D 6 グリットに所在する掘立柱建物跡である。東西 2 間（4.8m）×南北 1 間（2.1m）を確認した。これを桁行 2 間×梁間 1 間の建物と捉えることも可能であり、この場合、P207 と P216 は、この建物に付随する棟持柱とも考え得る。しかし、第1次調査で検出した掘立柱建物跡がいずれも南北方向に桁を据えており、そして梁行 1 間の掘立柱建物跡ではその規模が 3 m を超えていることなどを考慮して、ここでは南北に桁を据える建物跡（恐らく純柱建物）の一部と捉えたい。この場合の主軸方向は N-11°～E であり、第1次調査で検出された掘立柱建物跡や溝群の主軸方向と近似する。

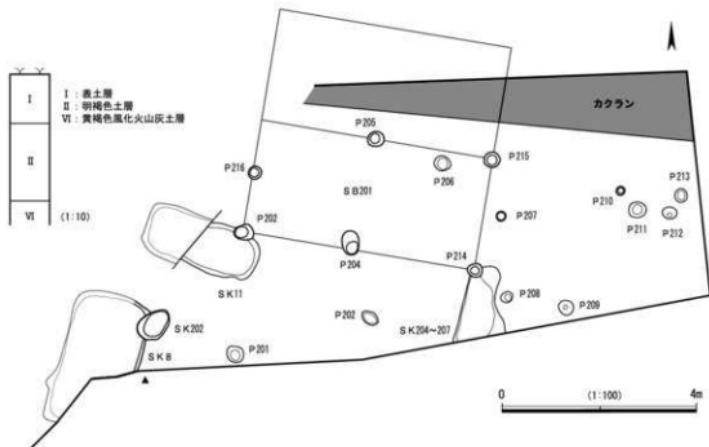
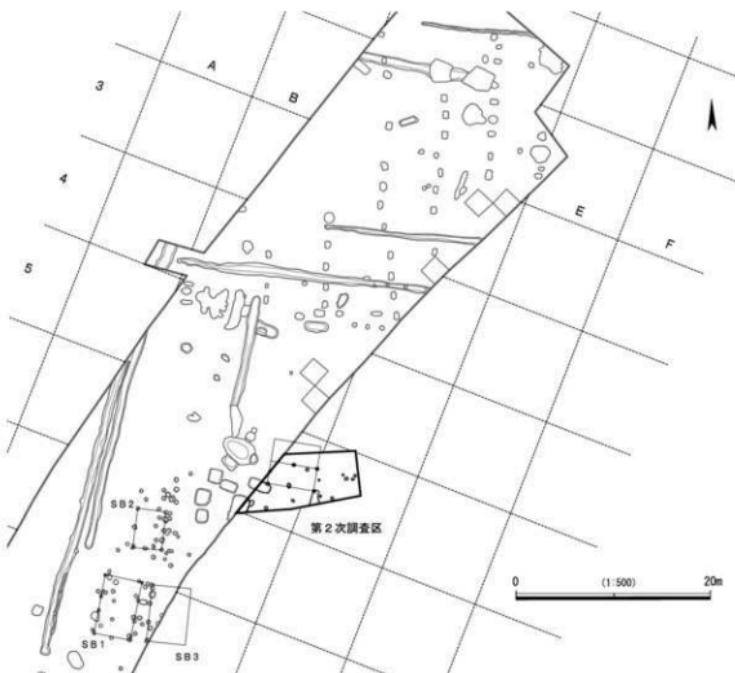
S K8 第1次調査で検出した SK8 の未調査部分である。南側の一部が調査区外となる。平面形は長方形を呈し、断面が箱形となる。覆土から須恵器の小片が出土しているが、これは遺構の埋没過程もしくは構築時に混入したものであろう。

S K11 第1次調査で検出した SK11 の未調査部分である。第1次調査で検出した部分（西側）については平面形が整った長方形を呈していたが、今回検出した部分（東側）は不整な長方形であった。

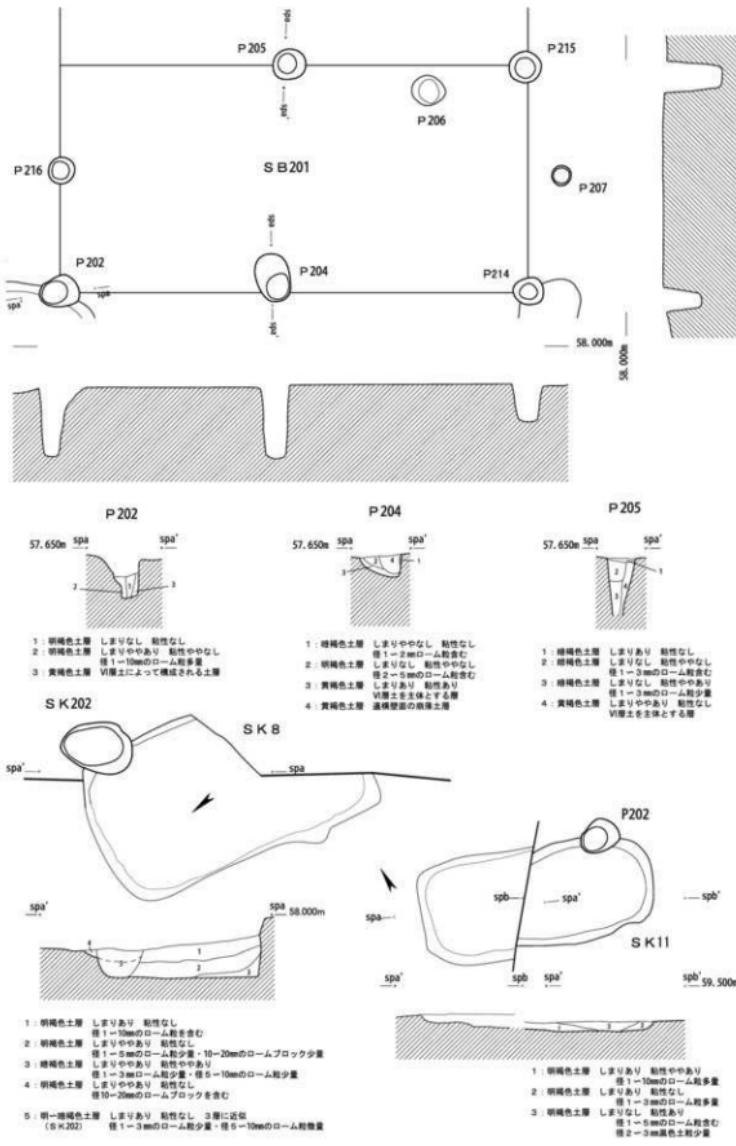
4 遺物（第5図・写真1）

1 は SK201 覆土から出土した須恵器片。甕もしくは瓶類の頸部付近であろう。2～17 は I・II 層から出土した時期不明の土師質土器である。2 は口縁部資料である。短頭で胴部に向かって大きく広がる形態を見せる。器種は不明。3・4 は薄手の一群で皿類に分類される。5～17 は厚手の一組をまとめた。胴部～底部にかけての破片が得られており、胴がふくらむ壺のような器形が推測されるが、内面調整が丁寧に施されていることから鉢に分類する。これらは胎土・調整、そして焼成によって 5～14 と 15～17 とに二分される。前者は後者と比較して、胎土がきめ細かく、器内外面の調整も丁寧であり、焼成も良好である。

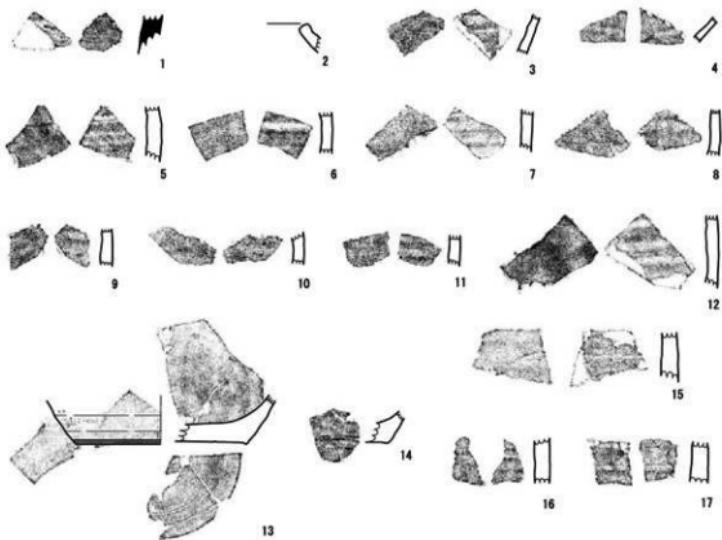
このほか、P213 覆土、底部付近から頁岩製の刺片が 1 点出土している。



第3図 調査区全体図・土層柱状図



第4図 個別造構図 (1:50)



第5図 遺物実測図 (1:3)



写真1 出土遺物

第V章　まとめ

第2次調査区は第1次調査A地区に連なる調査区である。A地区では溝状遺構による区画の中に掘立柱建物跡や土坑が確認されている。今回検出した掘立柱建物跡S B201も、この区画に合う軸方向に配置されており、一連の施設群として捉えることには問題はないだろう。そして、S B201がこれら土坑群の東で検出されたことによって土坑群の三方を「コ」字状に取り囲む建物配置が予想されるため、土坑群と掘立柱建物群とが密接に関連するという認識に至る。平面形が長方形を呈する土坑群（SK 6～11）は、副葬品など墓であることを直接示す遺物は出土していないが、三貫製遺跡（酒吉町）をはじめとする先行事例と遺構形態が類似するため土壤墓と推測された。しかし、SK11については、同様に未調査部分を検出したSK 8と比較しても非常に浅く、やや不整形であり、むしろ後世の擾乱とも推測されるSK 204～207に近い内容をもっている。S B201南西隅（P202）がSK11と重複する点も、これがSK 8などと性格を異にする遺構であることを示唆している。

このように、第1次調査の成果に対して若干の修正はあったものの、第2次調査の結果によって、遺跡がもつ非日常的な場としての特徴が追認されたと言える。出土した土師質土器は近代（明治期）の在地窯で生産された可能性もあるが、碗の欠落と非常に丁寧な内面調整など、日常具としての様相を全く見せない点において、遺跡の特徴と調和している。

浦畠遺跡は中世（13～15世紀）の遺跡であり、南東の狭い範囲に7世紀末～8世紀前半の集中的な活動痕跡、そして縄文時代と平安時代の希薄な遺物分布が重なり合う。縄文時代については、浦畠遺跡の西に位置する晚期の拠点的集落、朝日遺跡を基点とする活動によって残されたと推測される。壺形土器の単体出土などは周縁の様相の一端だろう。一方、平安時代については、広い範囲からごく少量のロクロ土師器片や須恵器片が出土するという状況である。近接地の試掘調査で出土したロクロ土師器片〔長岡市教育委員会2007〕や、朝日遺跡で採集されたという須恵器片も含め、未調査地点に当該期の明確な分布範囲があり、それが後世の土地利用によって2次的に散布されていった様子が想起される。SK201覆土から出土した須恵器片についても、こうした理解の中で把握しておきたい。

参考文献

- 井上慶隆 2001 「紙屋莊」越路町編『越路町史』通史編上巻。146～157頁。
- 加藤 学 1999 「遺構の形態分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 和泉A遺跡』（本文・観察表編） 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団。28～29頁。
- 越路町 1998 『越路町史』資料編1 原始・古代・中世。
- 長岡市 1992 『長岡市史』資料編1 考古。
- 長岡市教育委員会 2007 「来迎寺浦畠地区試掘調査」『平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』長岡市。20頁。
- 長岡市教育委員会 2008 『浦畠遺跡』 長岡市。
- 渡辺秀男 2007 「新潟県越後平野南部の河成段丘の編年と構造運動」『地球科学』61。129～142頁。



調査区完掘状況（東から）



調査前現況



表土剥ぎ



造構確認作業



造構確認状況（IV層上面 西から）

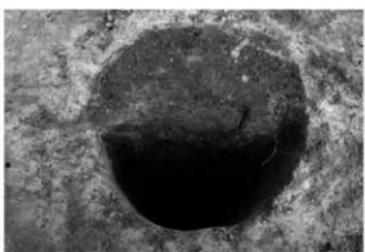
写真2 調査写真①



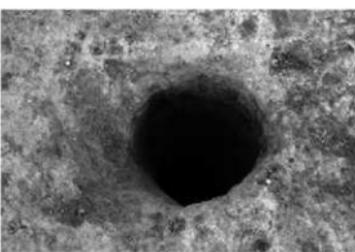
遺構調査①



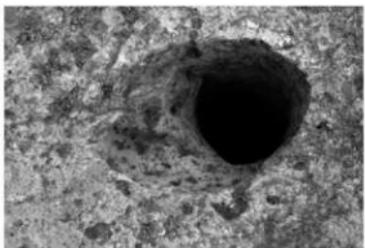
遺構調査②



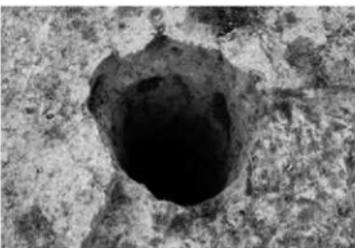
S B 201柱穴半截状況（P 205 西から）



S B 201柱穴完掘状況①（P 202 北から）



S B 201柱穴完掘状況②（P 204 西から）



S B 201柱穴完掘状況③（P 214 西から）



S K202・S K201半截状況（西から）



調査区埋戻し

写真3 調査写真②

報 告 書 抄 錄

ふりがな	うらはたいせき に							
書名	浦畠遺跡 II							
副書名	墓苑建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	新田康則							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町 2番地 1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2011年3月16日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
浦畠遺跡	新潟県 長岡市 来迎寺字浦畠 889番地1ほか	15021	448	37° 23' 37"	138° 46' 36"	20100726 ~ 20100730	54.6 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
浦畠遺跡	集落跡	中世		掘立柱建物跡 ・土坑		須恵器・土師質土器		なし

浦畠遺跡 II

—墓苑建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 23 (2011) 年 3 月 16 日 印刷

平成 23 (2011) 年 3 月 16 日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス

